

桜島および屋久島で採集されたチレニアイガイ (二枚貝綱, イガイ目)

—本種の日本での分布南限地について—

久保田 信*・山本 泰司*・能崎不二夫*

Shin KUBOTA, Taiji YAMAMOTO and Fujio NOZAKI: Mediterranean blue mussel (*Bivalvia*, *Mytiloida*) collected from Sakurajima and Yakushima Islands—On the southernmost distributed place in this species in Japan—

はじめに

わが国におけるチレニアイガイ *Mytilus edulis galloprovincialis* LAMARCK, 1819 の地理的分布は、久保田による1976年から本年に至る調査研究によると、北海道から九州にかけての沿岸に広く分布することが知られている (KUBOTA, 1992, 未発表データ)。日本で本種を採集した最南端地は鹿児島県久志で、マダイ類の養殖筏のロープに多数の小型個体が付着していた (前後軸長 36 mm 以下, N=63) のを1987年 8月25日に採集した (KUBOTA, 1992)。

チレニアイガイは、これまで南西諸島からは報告されていない (岡本一志, 1988; 岡本一志ほか, 1988など)。しかし、最近、慶良間列島阿嘉島で多数の個体が漂着しているのが発見された (久保田・林原, 1995)。この島の全沿岸で1994年 3月から1995年 2月までに採集した生貝と死貝をあわせた791個体は、中華人民共和国から黒潮と季節風の影響でブイに付着したまま漂流してきたものと推定された (久保田・林原, 1995)。

上記のように、チレニアイガイは日本では鹿児島県薩摩半島が最南端の採集地であるが、いくつかの動物図鑑 (決定版 生物大図鑑 貝類, 世界文化社, 399 pp., 1989; 学研生物図鑑 貝11, 学習研究社, 294 pp., 1983; 新編日本動物図鑑, 北隆館, 793 pp., 1984) などでも、本種の分布は、単に、日本全国あるいは日本各地と記されている。チレニアイガイは、周知のように、ヨーロッパからの帰化種であり、生物学的ならびに水産学的に本邦沿岸での分布拡大に注意を払う必要がある。加えて、上述のような阿嘉島での知見から、ラフティングによる外国からの分布拡大の可能性にも充分留意する必要がある。そこで、今回、鹿児島県の桜島で、再度、分布調査を行なうと同時に屋久島において初めてイガイ類の分布調査を実施した。その結果、両島からチレニアイガイを発見したので、生物地理学的考察を加味し、調査報告を

行なう。

材料と方法

1994年 5月24日および 5月25日の両日に屋久島において、また同年 5月26日に桜島において、主に低潮時の磯採集によりイガイ類、特にムラサキイガイ類の分布調査を実施した。屋久島では大きな河川の流出する河口域や港湾などを計 6 地点 (安房: 安房川河口, 栗生: 小楊子川河口; 栗生浜岩礁, 永田: 永田川河口, いなか浜: 岩礁, 一湊: 一湊川河口, 宮之浦: 宮之浦川河口; 宮之浦港) で調査した (図 1)。桜島では、2 地点 (白浜: 岩礁, 袴腰: 港) で実施した。各々の調査地点では、筏のブイやロープおよび岸壁、さらには天然の岩礁や転石な

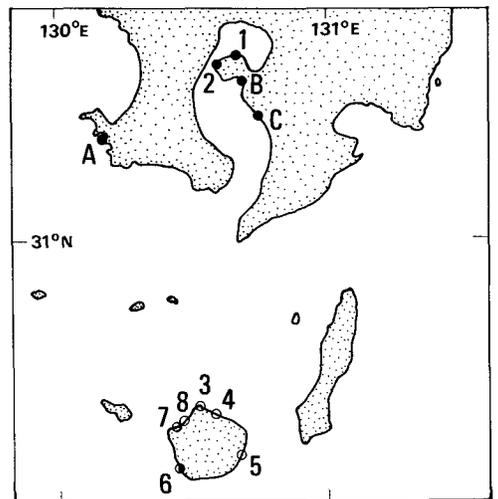


図 1 チレニアイガイの分布調査地点と生息地 (●: 生息地, ●: 漂着地点, ○: 未発見場所). 1: 白浜, 2: 袴腰, 3: 一湊, 4: 宮之浦, 5: 安房, 6: 栗生, 7: 永田, 8: いなか浜, A: 久志, B: 海瀉, C: 古江. (A-C は KUBOTA, 1992 による)

* 京大大学院理学部瀬戸臨海実験所

どさまざまな基質上での生息状況を調べた。加えて、海浜に漂着したものがあればそれを収集した。屋久島の栗生浜においてのみ、磯採集に加えてスキンドビングにより水深3m以浅の潮下帯の調査も実施した。

結果と考察

桜島北岸の白浜では、岩礁やコンクリート製の消波ブロックに小型（前後軸長13-28mm, N=43）のチレニアイガイが、多数付着していた。また、今回、採集はしなかったが、桜島西岸の袴腰にあるフェリー乗り場のコンクリート岸壁には、大型のチレニアイガイが群生していた。白浜では、今回が初めての分布調査であったが、内湾性のチレニアイガイが多数生息していた。袴腰では、1987年8月27日の調査時に前後軸長73mm以下（N=98）のチレニアイガイを養殖筏のブイやロープから採集している（KUBOTA, 1992）。また、同日に桜島より南東方向に数十kmほど行ったところの海潟と古江において（図1, B, C）少数のチレニアイガイを同様の基質から採集している（KUBOTA, 1992）。よって、本種は、桜島周辺では、個体群が継続的に維持されていると思われる。

一方、屋久島においては、6地点ともどの基質上にもチレニアイガイの生息が認められなかった。しかし、南西部の栗生浜の高潮線付近においては、表1に示したように13個体の小型のチレニアイガイが収集された。しかし、これらの個体は既に死亡しており、わずか1個体（前後軸長38mm）に乾燥した軟体部が残っているのみであった。また、3個体（前後軸長39-48mm）では片方

の貝殻が発見されなかった。本地点では磯採集に加えてスキンドビングによる集中的な生息調査を実施したものの、生きたチレニアイガイは見あたらなかった。イガイ目の生貝として、本地点からヒバリガイ *Modiolus auriculatus* (KRAUSS), ヒバリガイモドキ *Hormomya mutabilis* (GOULD), ムラサキインコガイ *Septifer virgatus*, およびクジャクガイ *S. bilocularis* (LINNAEUS) が採集された。

今回、栗生浜で採集したチレニアイガイは、薩摩半島や大隅半島産のものが漂着した可能性もあるが、はじめに述べたように、採集年や黒潮の流路を考えると中華人民共和国からの漂着である可能性もある。従って、屋久島がチレニアイガイの本邦における分布南限地とは断定できない。これまでの調査結果と今回の結果をあわせると、九州南部の鹿児島県沿岸が本種の分布の南限とみなしてよいだろう。今後も南西諸島全体にわたり、特に内湾や河口域におけるイガイ類の分布調査が期待される。

摘 要

1994年5月下旬に、鹿児島県屋久島栗生浜の高潮線付近で、チレニアイガイを13個体（前後軸長29-48mm）採集した。全個体は死亡しており、1個体のみ乾燥した軟体部が残存していた。これらは、中華人民共和国あるいは日本の九州沿岸から漂着した可能性がある。一方、桜島の白浜と袴腰では、1994年5月下旬に多数のチレニアイガイの生息を確認した。これまでの調査結果とあわせると、九州南部の鹿児島県沿岸は日本でのチレニアイガイの分布南限地で、個体群が継続・維持されていると思われる。

参 考 文 献

- KUBOTA, S. 1992: Four bivalve-inhabiting hydrozoans in Japan differing in range and host preference. *Sci. Mar.*, **56**(2-3), 149-159.
- 久保田信・林原 毅. 1995: 慶良間列島, 阿嘉島へ漂着した多数のチレニアイガイ. *みどりいし*, **6**, 17-19.
- 岡本一志. 1988: 沖縄海中生物図鑑. 第4巻. 228pp. 新星図書, 那覇.
- 岡本一志ほか. 1988: 沖縄海中生物図鑑. 第5巻. 227pp. 新星図書, 那覇.

表1 屋久島で採集したチレニアイガイのサイズ組成

前後軸長 (mm)	左右の貝殻が揃った個体の数	片方の貝殻しかない個体の数
26-30	1	0
31-35	1	0
36-40	3	1
41-45	5	1*
46-50	0	1
計	10	3

* 貝殻の内表面にウズマキゴカイが多数付着 (cf. 残りのものには内外表面に付着生物はまったくみられない)

南 紀 生 物

第37巻 第2号 別刷

Reprinted from
NANKISEIBUTU: The Nanki Biological Society

Vol. 37, No. 2
Nov. 1995